

ありふれた暗殺教室
with 深淵卿

Kaimax

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新学期を迎える少し前『月の7割が蒸発した』というニュースが数週間だけ出回った。実際に月の7割は蒸発していたのだが、ちょうどニュースで取り上げられ始めた数日後に月は完全に元通りになるという摩訶不思議なことが起こる。

各国のトップのごく一握りや英国国家保安局、バチカンの面々は誰の仕業か分かってきた。月を元通りにして騒動を鎮静化したのはあの帰還者集団の魔王とその嫁々ズである。

最初はどうしてもあの魔王がわざわざ月を元通りにしたのか分からなかったが、問題が一つ消えたのだから気にしないようにし、各国のトップ達は次の問題に焦点を向けた。

その問題とは、月を破壊した黄色い超生物のことである。その超生物は月を破壊し、その翌年つまり来年の3月には地球までもを破壊するとされ、各国は秘密裏に暗殺しようとして試みた。

しかしその尽くが躲され打つ手がない状態に各国は頭を抱えていたのだが、つい先日件の超生物は、なぜか『櫛ヶ丘中学の3年E組の担任ならやつてもいい』などと意味のわからないことを連絡し、正式な書類を自分で会議の場に持ってきた。それを各国は生徒に手を出さないことを条件に了承した。

一方、日本の魔王について知っている者達からあの魔王に協力を申し込んではどうか？という案が出た。最初は魔王と直接関わりのある人から、「そんなこと頼めるわけないだろ！」と言われたが、事実地球がなくなつて困るのは流石の魔王達でも同じではないか？月も元通りにしてほしいけんじゃね？と考え始めると危機的状況の今、意見のまとまりは早かった。

そして魔王は暇ができたら攻撃してみると言つて、一応2月の時点で殺せてなかったらどうにかすると約束してくれた。

本当は某魔王の娘が「もうお月様見れないの？」と南雲家でシュン……としてしまい、親バカな南雲家の魔王達は翌日には再生魔法で月を元通りにしてしまい、地球の爆破に關しても最初は別にトータスにでも移住するか……ぐらいに考えていたが、これまた某魔

王の娘が「お友達と会えなくなるの？」と聞いてきたためどうにもなりそうになかったら助太刀する事にした。

やはりこの世で最も強いのは魔王でもその嫁ぐズでもなくその娘なのである。

この物語は某魔王の右腕が再生魔法にて無理やり中学三年生の体にされ、深淵卿…もとい遠藤浩介の秘密を出来る限り隠しつつ暗殺教室に混じるといふものである。

目次

| | |
|-------------------------------|----|
| プロローグ | 1 |
| 初めての登校 | 10 |
| 深淵卿の渾身の言い訳！E組には効果 が無いようだ…… | 20 |
| この素晴らしき（無邪気な）口撃に精神安 定剤を！ | 30 |
| 拝啓、南雲様……E組、マジヤベエつす | 38 |

プロローグ

誰もが寝静まり眼下の家々の光もすっかり消えている深夜に、街灯が一つも見当たらない山の中で街を見下ろしながらペットボトルのお茶を飲む黒装束の青年がいた。青年はペットボトルをしまおうと再び山を登り始めた。

青年は暗闇の森の中でも迷うことなく真つ直ぐに目的地に進んでいる。さらに疲れしているような様子もない。

ならなぜ、休憩をしていたかというと、単純に景色がいいかな?と思つたからである。実際は電気が消えているためそこまで綺麗ではなかったが、空はかなり綺麗な星空だった。

「これくらい綺麗な星空は今時珍しいよな……今度ラナにも見せてあげたいくらいだ」
ラナというのは青年の彼女のうさ耳お姉さんである。

普通の人が聞けば「……は?」となるが、別にこれは青年の趣味でもなんでもない。本当にうさ耳が付いているのだから仕方がない。

そう、今現在この山をゆつくり夜空を楽しみながら登っているのは世間を騒がせた『帰還者集団』の魔王たる南雲ハジメの右腕、遠藤浩介もとい深淵卿であるっ!

何かと面倒ごとを任されたり、引き受けたりしている彼は、帰還者の仲間内から『さりげなく人類最強』の称号をもらっている。

実際、浩介は魔王の右腕という称号に対して、プライドのようなものがそれなりにある。そのため無茶な要求や任務でも出来る限り自分の手で解決してきた。

まあ、その結果が嫁が今現在5人に加え、明らかに俺が通報される年齢の子にアプローチまでされているなんて、日本人の浩介からすれば非常識なことになっているのが……

それもこれも彼の彼女のラナが「魔王たるボスの右腕ならお嫁さんもたくさん居ないと！」と言って世界にいるまだ見ぬお嫁さんを探そうなんて言い出したためこんなことになっている。

「はあー……」

今までの地球に帰ってきてからのファンタジーな戦いを思い出しているとやはりどうしてもため息が出てしまう。もしかしたら今回の騒動で6人目？7人目？のお嫁さんなんてものが出るかもしれない。できないはずだが、可能性がゼロとは言いがたい。「とりあえず、今日挑んでみてダメだったら南雲がなんとかしてくれるだろ」

そもそも俺が今日ここに来たのはあくまでも俺で倒せるくらいなのかどうかを測る戦力分析が最優先なのだ。俺が戦って勝てそうならばそれでよし、無理そうならば俺が出

来る限り情報を引き出して南雲が引き継ぐ。

そのため無理して勝たなくてもいいのだ。

そんなこんなで目的地である山上にある木造の建物（事前に聞いた話だと学校の教室らしい）が見えてきた。

ただでさえ薄い気配に“気配遮断”を使って建物に近づく。すると建物の中から

「ぬっひよー！ー！ー！これはいい乳をしますねえくくくうおおおこつちの尻もやべー！ー！！」

穴が開くかというぐらいにグラビア本を凝視している黄色いタコのような触手生物がいた。

（あの話マジだったのか、黄色いタコ型生物なんて……）

とりあえず気づかれたような様子はないので、建物の入り口からそつと中に入り、先ほどタコがいた部屋へと行って普通にドアを開けた。

「にゅ？」

「…え？」

バツチリと目が合った。

いや、まあ普通のことと言えば普通のことなんだが、俺からすれば相当な困惑ものである。

なにせ、今は気配遮断を使っているし、たとえ使ってなかったとしても自動ドアが3回に1回しか開かず、ヒュドラの本拠地でも食事をしてても気付かれなかったぐらいに影が、いや気配が……いや存在が薄いと言われている俺なのだ。

相手がグラビアに夢中になっていたため問題ないと判断したがそれは傲りだったよ
うだ。

「……………」

「……………」

沈黙の気まずい空気が漂う中、取り敢えず俺はこのタコの暗殺にかかるため緑色のゴムナイフで切りかかった。

「にゅやっ！いきなりですか!？」

「なんかごめん!」

がしかし、瞬間移動かと思うぐらいの速さでタコはかわして、俺に非難の声らしきものを浴びせる。

ゴムナイフなんかで殺せるものかと思うかもしれないが、これはどうやらこのタコにだけ効く武器だそう。国が用意してそう言ったのだから間違いない。

拳銃やライフルなんかもあったが某魔王ならともかく、俺には到底銃なんて無理なのでナイフを選択した。

「まったくこんな夜分遅くに暗殺とはどこの殺し屋も懲りませんねえ」

余裕の表情とともにタコは俺の攻撃の尽くを躲していた。事前に情報をもたらっていたとはいえ実際目の当たりにするところも追いつけないとは……

このままではキリがないと判断し、いったん攻撃の手を緩めるとタコは俺に対して無数の触手をこちらに向けてきた。

「ヌルフフフ、ではこちらの番ですね!？」

タコは驚きのあまり固まってしまった。

なぜなら今の今まで目の前で自分を攻撃していた俺が煙とともに消えてしまったからだ。

そう、俺は念のため分身に建物に入ってもらい俺は建物から少し離れた所から分身の様子を確認していたのだった。

その結果、逃げを選択し、南雲に任せることにした。あんな高速タコをまともに相手にできるのはそれこそ南雲かその嫁ぐズだけだろう。

というわけで俺は家に帰宅したのだった。

「というわけで帰還しました」

「おう、迷惑かけたな」

「いや、別にいいよ。俺はもう慣れたから」

南雲家のリビングにて俺は実際に戦ってみた感覚を南雲に伝えていた。

その場にはなぜか、普段俺の任務については何も言っていないユエさんや、白崎さんにテイオさんまでいて、何がなんだかわからないな取り敢えず報告を済ませる。

「いや、エンドウは反省すべき。任務を失敗してきた」

「いや、別に失敗というわけでもないであろう？勝てなさそうなら情報を集めるというのがもう一つの任務だったのじゃから」

ユエさんの厳しい態度とは裏腹に、フォローしてくれるテイオさんに心打たれつつも、俺の中の警鐘が「アレ？テイオさんってこないいい人だっけ？」と告げている。

「そ、それじゃあ、俺はもう帰っていいよな？南雲」

「まあ待てよ、別に急ぎのようでもあるわけじゃないんだろ？せっかくだしゆっくりして行けよ」

(なんか、ますます怪しくなってきたな)

普段の南雲はこんなことは絶対に言わない。俺に対してかなりの信頼を置いてくれているのは確かだが、ここまで言ってきたことは初めてである。

「い、いや、悪いよせっかくの休日なんだから………ひっ!?!」

嫌な予感がして帰ろうと思って立ち上がると、後ろから南雲が右肩を、白崎さんが左

肩をガツ!!してきて動けなくなった。

「……………」

「えーと……………まだ、何か御用でしょうか?」

内心冷や汗が止まらないが、怖いくらいの笑顔で何も喋らずこつちを見られると流石に堪えるのか、自然とそんなことを言っていた。

「いやな?俺も昨日お前がちょうど山にいるであろう時間に考えてたんだよ。国からもらった資料によると、いくら遠藤でも一晩でこれは無理かな〜ってさ」

「……………どうぞ」

肩に手を置いたままニコニコと語り出す南雲に続きをうながして俺に諦めの感情が芽生え始める。

「それでもう一回国の資料に目を通してたら、あの校舎を使ってる『櫛ヶ丘中学3年E組』の人達が暗殺の訓練とともに件の超生物の暗殺をしてるそうなんだよ」

「それで俺はそこで中学生を鍛えればいいのか?はつきり言ってできないと思うぞ?まづそもそも気づかれるかどうか……………」

「違うの遠藤くん、先生じゃなくて生徒として参加して欲しいの」

「そう、遠藤、お前には中学生としてあの超生物の暗殺をしてくれ。もちろん帰還者のこととは悟られないようにな?」

「……………」

中学生？俺が？高校生も終わりを迎えそうな俺が？

流石にそれには無理があると思うが、こうも肩ガツ！されて足止めされているのを見るに本気なのだろう。

「安心しろ遠藤。不自然じゃなくしてやるから」

「は？それってどういう……」

「今だー」

南雲が声をかけるとともに素晴らしい動きでユエさんとテイオさん、白崎さんが俺を三角形に取り囲んで魔法を使い始めた。

だんだん意識を保てなくなり、その場に倒れ伏してしまった。

「お……………お……………おい、起きろ遠藤」

「う、うくん。何が起きて……………は？」

気絶してたらしい俺は、南雲に起こされ体を起こすと目の前にはそれなりの大きさの鏡があった。それ自体は別に驚くようなことではない。

ならなぜ驚いたかという、気を失ったと思っただけ体が縮んでしまっていた！なんて某名探偵みたいなことになっているからである。いや、まあ某名探偵ほど小さくはなっ

ていないが感覚で言うところちょうど中学3年くらいの時の俺になっていた。

ここにきて俺はようやく諦めた。もう何をしても無駄だと。

「再生魔法で時に干渉して肉体を戻しつつ、変成魔法で肉体を作り替え、昇華魔法でその強度をあげ、ユエと香織、テイオの魔力に俺の魔力を使ってお前を中学3年くらいに戻した。ちなみに技能とかはそのままにしてあるから明日から頑張ってくれ。それとこれ、全部対超生物の物質に作り直した深淵卿グッズだ」

「はあ、もうわかったよ。諦めるよ」

「ん、賢明な判断」

「それにしても明日からって急だなあ、準備とかしてないぞ?」

「その辺は国に用意してもらったから大丈夫だ」

こうして俺は明日から柵ヶ丘中学に3年E組の転校生として通うことになった。

初めての登校

「はあ……………」

俺はため息と共に改めて自分の体を見下ろした。そこには今まで異世界と地球で戦ってきた、17歳遠藤藤浩介の体とは似ても似つかない体、中学生時代の体があった。今更ながら俺は頭の中で自問自答に陥っていた。

いくら地球の危機だからと言ってここまでする必要あるのか？それに南雲なら簡単に殺せると思うんだけど……………

そりやあ最悪の場合は手を貸してくれるとはいえ、最悪の場合のみしか手を貸してくれないというのは流石に酷くないか？だって地球の危機なんだよ？ミュウちゃんにもお願いされてたでしょ？

まあ、南雲達のことだし面白半分なんだろうけど……………流石にもう諦めるしかない。

ようやく諦めのついた俺はハンガーにかけてある真新しい（実際新品）の櫛ヶ丘中学の制服を手を取った。

今現在俺は南雲と国が用意してくれた防犯用アーティファクト完備のアパートに住

んでいる。流石にこの姿のまま家で帰るといくら南雲が我等が魔王様でも家族からクレームが入りかねない。

しかし、一般のパーツにアーティファクトなんてつけていいのかと思うが、このパーツは南雲がたまに地球に連れてくるトータスの人達用に用意したもので、今現在使われていない。

ちようど柵ヶ丘からもそこそこ近いのでここに約1年間住んで学校に通うことになる。

ちなみに高校に関しては俺の分身体に行かせている。高校は休めないなので分身体を出した。これも中学生の体になっていたが、そこは南雲達に責任があるため魔力が回復次第分身体を元の体に戻してくれた。

しかし、これで常に分身二体分（もう一体はエミリーの家）の魔力を消費し続けることになった。仕方ないとはいえ少ししんどい。

そんなことを考えていると、ちらほらと柵ヶ丘の制服を着た人が見え始めた。すぐ横を通つても気づかれる様子はない。やはり普通に俺を見つけられる人は限られているようだ……

一昨日の夜きたばかりの木造の校舎の玄関に着くと黒いスーツを着た真面目そうな人が立っていた。

「あの一、すみませーん……………」

「……………っ!？」

とりあえず話しかけた方がいいと思い、声をかけたがやはりというかなんというか気付かれない。どうしようかと考えていると、スーツの人は思ったよりも早く俺に気付きかなり驚いた様子だった。

「今日からここに来ることになった遠藤ですけど……………」

「あ、ああ…君が遠藤浩介君か、俺は防衛省臨時特務部所属の烏間からすまただおみ惟臣だ。この3年E組の表向き担任をしている」

「あ、ご丁寧にどうも」

ぼ、防衛省……………なんか、ほんとにやばい状況だったんだなあ……………

この3年E組の担任は、件の超生物もとい生徒が付けたらしい殺せんせーなのだが、国家機密のターゲットの名前を何も知らない本校舎の先生達に見せるわけにもいかずこの烏間さん……………烏間先生が書類上の担任らしい。それでもこの先生は体育の授業で暗殺の基礎訓練を担当しているらしく、毎日ここに足を運んでいるようだ。

「えーと、それで俺はどうしたらいいんですか?」

「そのことだが、今日のHR（ホームルーム）の時間に紹介するから、それまで職員室で待っていてくれ」

職員室か……一昨日のことだし、見た目変わってるし大丈夫だよな？

鳥間先生に案内されて職員室に入ると、あの一度見たら忘れられないような黄色い触手が目に入る。

「おや？鳥間先生その子は？」

「そういえばお前はまだ知らなかったか、転校生の遠藤浩介君だ。俺も昨日の朝知らされたからな、お前が知らないのは仕方ない」

「転校生ですか……ふむふむ」

な、なんだ？めっちゃ見られてるんだが……もしかして俺が一昨日ここに来たやつだつてバレたのか!?

もしもバレた時のために、気取られないように宝物庫の準備をしていると不意に殺せんせーが話しかけてきた。

「いいですねえ、遠藤君が加われればまたより良い教室になりそうです。ちなみに得意科目と苦手科目を教えてくださいませんか？」

「と、得意科目ですか……？」

びびった〜なんか俺の正体について聞かれるのかと思った。それにしても、まず真つ先の質問が得意科目と苦手科目って……いや、待てよ。そういえばここは中学校だから俺全部習い終わってるんじゃないや……

結局ここで嘘言ったりしても、余計疑われるだけなのでここは正直に答えよう。

「得意なのは言語系全般で、苦手なのは強いて言えば……なんだろう？ん？最近はおんまりないかもです」

「そうですか！優秀なのですねえ〜」

「ど、どうも」

言語関係が全般得意なのはもはや仕方がないと思う。なぜなら俺達『帰還者』はトータスに行った時に例外なく“言語理解”の技能を手に入れており、それはこの地球に帰ってきてからも変わらない。

そのため、急に消えていなくなっていたのにも関わらず、戻ってきたと思ったら英語に古典、漢文なんかクラス全員完璧になっているなど、高校の先生からしたら困惑ものだろう。

実際、俺達の英語の先生なんか、俺たちの方が英語を完璧に理解しているのだから、授業中に萎縮してしまっって、チャイムがなると同時に逃げるように教室から出て行ってしまうのだ。

「おや、そろそろですね。それじゃあ遠藤君ついてきて下さい。」

「あ、ハイ」

先週までこの教室に無かった机と椅子がある。

それが意味するのは転校生が来るということだ。普通の学校ならばどんな人が来るのか、男子か女子かの話題で教室が少しながら騒がしくなるものだろう。

だけど、この教室では……………

僕が新しく追加された机と椅子を見て固まっていると、横にいた友達の杉野友人（すぎのともひと）が声をかけてきた。

「なあ、渚。やっぱり転校生って……………」

「うん、こんな時期に転校生なんてない話じゃないけど珍しいし、ましてE組に来るなんてなると……………」

「そうだよなあ。でも殺せんせーはいいとして、烏間先生が何も言っただけでなかったのがちよつと気になるよなあ？」

確かに、あの先生なら事前にメールでしらせてくれると思う。僕たちのことをきちんと考えてくれている人だから。

その烏間先生が何も言っただけでこないとすることは、知らされてなかったのか、もしくは急遽決まったのかのどつちかだけ……………

もし、前者だったらどうしよう……………怖い人じゃないといいけど。

教室の中のみんなが、おそらく転校生のことを考えていただろうタイミングで教室の

扉が開かれた。反射的にその方向を見ると、殺せんせーが出席簿を持って入ってきた。「にゅ?どうしたのですか、皆さん?そんなにこつちを見て、もしかして先生のどこかに何かが付いてますか!?!」

「「「「ハアアア」」」」

殺せんせーの空気の読めない発言に緊張していた場が碎けて、思わずみんなため息をしてしまった。

その様子に最初殺せんせーは困惑してたが、すぐになんのこともかを思い出す。

「なるほど、皆さん転校生のことが気になるようですねえ」

「先生、その転校生って……」

「それは直接聞いた方がいいでしょう。それではHRを始めます。日直の人は号令を!」

「起立!!……気をつけ!!……礼!!」

目の前の教室からものすごい数の発砲音が聞こえる。もちろん俺が聞き慣れた本物の火薬が爆発するような重く低い音ではなく、ガスガン所謂モデルガンの発砲音だった。

それにしても30人近い人が同時に同じ的相手に撃っても当たらないものなのだろ

うか？いくら最高速度がマツハ20だとしても、一昨日見た感じでは「瞬光」と「先読」の付与された南雲謹製のアーティファクトを使えばどうにか追いつけるくらいだったと思うけど。

「今日も命中弾はゼロですねえ〜やはり弾幕が短調で分かりやすいですよ。烏間先生あたりに弾幕について聞いてみたらどうでしょうか？」

殺せんせーは出席簿を閉じながら顔を緑の縞模様に変えてそう言った。

……いや、緑の縞模様ってなんだよ!?

「君には言っただけでなかったが、奴は態度によつて顔色が文字通り変わる。今の緑の縞模様は相手を舐め切っている時の顔だ」

「へ、へえー」

なんかすごい皮膚(?)してんだな。

殺せんせーの顔色が元に戻るのをそれとなく見ていると、殺せんせーが長い触手をこちらに向けて手招きのようなことをしていた。

今から自己紹介を行うと意識すると、戦場とは違う緊張が走ったが別にこのくらいの緊張感はどうということもないので、適当に振り払い教室に入る。

「それでは今日から皆さんと一緒に先生の暗殺を行う仲間を紹介します！」

「誰もいないじゃん殺せんせー！」

案の定というか、予想通りというか、今し方扉を開いて入っていったのにもかかわらず、クラスの誰からも気付いてもらえなかった。

「にゅや!? そんなことは! ねえ? 遠藤君!」

「……別にいいもん気づかれなくても。生まれつきだし、もう慣れたし、俺リア中だし、気にしなくていいですよ。殺せんせーいつものことなんで……」

「「「え?」」」

俺が声を発した途端、教室の中にいる人達が一齐にこつちを見た。しかし、その目は俺を捉えておらず俺の後ろの黒板を見ているようだった。

「あーいるよ! 殺せんせーの横に」

一番最初に気付いてくれたのは水色の髪の少j……少年だった。

彼が俺の立っている場所を指差すとチラホラと目が合う人が増え始めた。

「遠藤浩介です。この通り影が、気配が、存在が希薄なんで、気付いてくれると嬉しいいです。そりやあもうホントに嬉しいです」

「な、なんかごめんな?」

俺が自己紹介(?)をすると、さつき殺せんせーに「誰もいないじゃん」と言っているたちよつとチャラそうな人が声をかけてきた。

「いや、いいよ。もう慣れたし、両親に気付かれないよりも全然平気だし」

殺せんせーのおかげで（せいで？）弛緩していた空気が今度は暗くなった。

男子からは同情を買ってしまい、女子は徐にハンカチで目元を押さえ始めるものもいた。

俺はいつの日かも思った「同情するなら存在感をくれ」という言葉を思い出した。

「そ、それでは！遠藤君の席は後ろのカルマ君の隣です」

俺は「果たしてこの調子でみんなと仲良くできるのだろうか？」と一抹の不安に駆られてしまった。

深淵卿の渾身の言い訳! E組には 効果が 無いようだ

…

「遠藤だっけ?ぶつちやけ聞いていい?」

涙の自己紹介が終わったあと、つつがなく終わったHR後チャラそうな人が話しかけてきた。

「えーと……」

「俺、まえはらひろと前原陽人よろしくな」

「お、おう。それで聞きたいことって……」

十中八苦俺が殺し屋かどうかを聞きにきたんだろうなあ。みんな気にしてないフリしてるけど、意識がこっちに向いちゃってるし……

質問が来ること自体は予想してたので、あらかじめ昨日の内に南雲にどのくらいなら話してもいいかを聞いたところ、帰ってきた返事は

「別に帰還者つてことを伏せればほとんど答えてもいいぞ」

だった。

普通に考えて、ベルセルクの事や、バチカンでの悪魔騒動は話さない、というか話し

たかないので伏せるとしても、他に話すような事はあまり無いのだ。

「遠藤ってアッチの人？」

「半分浸かってるって感じかな」

「半分？」

俺の微妙な答えにこっそり聞いていたみんなは思わずこつちを見た。

思わず苦笑いになりつつみんなの疑問に答える。

「うん、俺が海外旅行してるときに、ちようど俺の上司が抱えてる案件があったら頼まれるくらいだから」

「その案件っていうのは……………」

「あ…………話していい内容かどうか鳥間先生に聞いた方がいいかも」

俺の発言に周りの空気が固まってしまい、やってしまった!と遅ばせながら気がついた。この言い方と話の流れ的に、殺しかなんかと思われている可能性がある。

せめてもの抵抗として「殺しじゃ無いよ?」と言ってみたが時すでに遅し、みんな完全に聞いていない。

「誤魔化さなくてもいいって、俺達だつてそんなくらいあるかもなつて思つてたんだし」

「いやーだから殺しなんてして無いって!!」

どうやってもみんな信じてくれない。「またまた〜」「気にしなくていいよ〜」「ハハハ

「ハハ」なんて棒読みで言ってるやがる。

どうにかして誤解を解いておかなければ後々面倒なことになりかねないので、後で南雲……いや烏間先生あたりにどのくらいまで話しても問題ない案件なのか聞いてみよう。

まあ、そのためには日本ですら掴んでいない情報なんかが流れると思うけど……仕方ないよな。うん。

「えー、それではこの英文の訳を出来る人は手をあげてください。……ふむふむ、やはりまだ少ないですねえ。まあこの難易度は仕方がないので……では、気配を薄くして逃れようとしている遠藤君!」

「……手をあげてないんですけど……」

本当に殺せんせーが体育以外の全教科を教えている。しかもこの中学レベルが高すぎる! 高校になってから教わったようなことも平気で授業に出てきてるぞ?

いくら中高一貫の超有名進学校だからってこんなんついていけないで当然だろ! こう言つちやあれだけど、落ちこぼれクラスでもこの授業理解できるだけ十分すげえよ!!

「誰も手をあげた人に当てるなんて言ってますからねえくくヌルフフ」

「はあ、えつと……彼らの先生は……音速飛行のタコのような黄色い生物です?……なん

だこれ？」

「おお、正解です。遠藤君！まさかこの英文を読めるなんて、流石に言語関係が得意というだけありますねえ」

意味のわからない英文を訳させられたと思つたら、今度はオレンジの顔に丸が描いてある顔になった。

無駄にバリエーション豊かだな、この先生……

「このようなことになってすまないと思うが、いい機会だ。君の実力を測らせてもらう。もちろん後々の訓練カリキュラムのためでもあるから全力でくるんだ。君の勝利条件は対先生ナイフを俺に当てることだ。」

「全力っていうのは体操服での全力ですか？」

「……戦闘服があるのか？」

「まあ、一応……（あんまり使いたくないけど）」

俺は今、校庭で烏間先生と対峙している。

少し離れたところでクラスメイト達はキラキラした目をこちらに向けて、殺せんせーはニヤニヤと笑いながら観戦していた。

はじめての体育の暗殺訓練は誰かとペアを組んで烏間先生と組み手形式で戦うとい

うものだった。が、ここでも問題発生。完全に俺の事を殺し屋（天職が暗殺者だからあながち間違いではないが）だと信じ込んでいるクラスメイト達は、力試しという名目で烏間先生と俺の対決を見たいなどと言ってきたのだ。

烏間先生もその提案に最初は否定的だったが、みんなに訓練を行なっていく上でどのくらいの強さなのかはわかったほうがいいと説き伏せられ、もちろん俺に拒否権などないので半ば無理やりここに立たされている。

つていうか、俺ここで戦うなんてことしたら卿出ちやつてこの先ここで生きていく自信なんてなくなるぞ。

「あのくやつぱりやめにしません?」

「……それは彼らに言ってくれ。俺にはどうしようもできん」

「ですよねー」

こうなったら出来るだけ卿が出ないように戦うしかない。なんか最近どんどん卿の出番が増えてるような気がするけど……どうにか抑え込むしかない。

完全に諦めた俺はポケットに手を入れその中に開いた宝物庫から南雲作サングラス。卿風というと「天眼」のサングラス……イタイイタイ。

「じゃあ、これだけ付けさせてください」

「……………わかった。開始は君のタイミングでいい」

サングラスをスチャツとつけて、ターンしそうになるのをグツと、それはもう必死に堪えた。

危ねえ、たったこれだけで卿になりかけたぞ。こんなんで大丈夫なのか俺!?

「行きますー!」

サングラスに付与された「瞬光」と「先読」を一応発動させてさらに「縮地」を使う。そして一瞬で烏間先生の背後をとりナイフを突き出す。

何故こんなに全力なのかというと、卿が出る前に速攻で勝つ。これしか俺の心を守る術はもはやない。一度でも躲されればもう手遅れだ。

呼んだ? というふうには出てきて、主導権を握られてしまう。それだけは絶対に避けなくてはならない。

そのためにも、今ここでものすごい動きをして後で怪しまれてもはやいい。新たな黒歴史を心に刻み込まれるよりは万倍マシだ。

「っ!!」

「フツ、これを躲すか……さすがは国の先鋭部隊にいただけはある……しかし、何故躲せた?」

刺突の姿勢のままニヒルな笑みを浮かべ、フツと笑いジョ○ヨ立ちしたその人は………そう! かの深淵卿! コウスケ・E・アビスゲートだ!! きつとこの様子を異世界の

ウサミミ暗殺集団が見たのなら「なんて香ばしいポーズなんだっ!」と言っただろう。

突然のジョ○ヨ立ちに固まってしまった烏間先生に浩介は、これまたフツと笑った。

「なるほど、戦士としての感……か。恐ろしいものだな。だが、本当の恐怖はここからだぞ? 反撃しなければついて来れまい?」

「反撃してもいいのか」

「フツ、当たり前だろう? さあ! コウスケ・E・アビスゲート……推して参る!!」

今日は一段とフツが多い卿はきちんと名乗りも欠かさない!

もはや、大半の人、いやこの場にいる全員が置いていかれている中、卿と烏間先生の試合が再び始まった。

「えっと……、なんだっただらうね? 今の……」

「「「「さあ……?」」」」

茅野の問いかけに近くにいたみんなが同時に答える。

茅野の言う「今の」とは言わずもがな、遠藤君の口調と雰囲気さがらりなんてレベルを超えて変わってしまっただ事だ。

意味のわからない名乗り? を聞かされた時、みんなは「アビスゲートどこから来た!!?」と思ったが、誰も口にはしてない。口の出来ない。なにせ、今現在目の前で繰り広げら

れている光景がとてもじゃないが信じられないのだ。

なにせ遠藤君の雰囲気が変わってから、烏間先生はずっと後手に回っている。遠藤君が言っていたように烏間先生も反撃しているのだ。しかし、遠藤君は危なげなく躲すか、反撃してきた拳や足を足場にして、飛び上がったなりなどの人間離れした動きで全て捌いている。

しかも近距離だけでなく、烏間先生とそれなりの距離が開くと体操服のポケットに手を入れて、どうやっても入らないような数のクナイ型の対先生ナイフを投げる。それも素人目でも分かるほどきちんと目眩しや、注意逸らし、攻撃、と機能している。

たまに「フツ」と言ったり、ターンしたり謎のポーズを取ったりしてるけど、想像を絶するほど強い。

「遠藤君、すごいね、渚」

「う、うん……僕達とはレベルが違う……」

クラスメイト達がそれぞれ関心したり、驚愕したりしている中、卿はかなり焦っていた。

マジかよ、こんだけやってるのに全部ギリギリで裁かれてるんだけど!? しかも、ちよつとずつだけ反応が良くなってきてないか!?

そう、思わず素に戻ってしまうほどに。

いくらまだ『深淵卿』の深度Ⅱ状態とはいえ、それでも深度Ⅱなのだ。普通の人間が対応できるようなものではない。

一旦攻防が止まり互いに少し距離ができたので、改めて烏間先生を見据える。

「フツ……流石にここまでやり合えた人間ははじめてだが……そろそろ限界じゃないのか?」

「そう言う君は……まだまだ余裕のようだな」

「これくらいでへばっついては今ここに立ってないからな」

ここでさらに卿はクルツとターンして、ナイフを烏間先生に向けた。

心身の高ぶりから卿はあと少しで自身の深度がⅢに到達することを予見し、もう決着がついてしまうのかという、憂いを含んだフツを放つと最後の攻防に入ろうとした。

「さあ!これで最後だ」

「降参だ」

「!!!えっ?!」

突然の降伏宣告に、卿が降臨したときのような沈黙が場を支配した。

しかし、それも束の間。

「!!!うおおおおお!!すげえええええええええ!!!」

一瞬で沈黙が歓声に変わった。突然の歓声に卿も驚き素に戻ってしまふ。それと同時、浩介の顔面は蒼白になり、急速に気配が薄くなつていく。

みんなが烏間先生と浩介のもとに駆け寄つてくる中、件の彼は気配と体を小さくして蹲つてしまった。

「あ、あれ？遠藤は？」

「グスツ……グスツ」

「……え？」

突然何処かから誰かがすすり泣く声が聞こえた。こんな時に泣くなんて誰だ？という顔でみんなが辺りを見渡すと……

「イタイ、イタイよお。なんでこんなになつちやうんだよお。なんだよ「反撃しなければついて来れまい」って何様だよ……グスツ」

という、いつものごとく、心に大ダメージを受けた浩介が体育座りで小さくなつていった。

その後浩介は、教室に戻つた殺せんせーと烏間先生、クラスメイト達が一堂に介した状況で、どうにか戦闘中に意図せず第二人格みたいなのが出てくるという、意味のわからない説明をして誰も何も納得してない中、必死に苦笑いを維持し続けるのだった。

この素晴らしき（無邪気な）口撃に精神安定剤を！

烏間先生との試合、そしてE組のみんなに卿を見られて浩介の心が死んだ翌日。

学校なんて行つてられるかつ！という心境だったが、無断欠席なんてしようものなら南雲から何をされるかわからない。

まだ、自分の状況について知っている帰還者の仲間たちならいい。しかし、昨日のはダメだ。初めて会ったばかりのまだよく知らない30名近い人達に厨二全開の卿を見られたのだ。

今日学校なんかに行ったら……

教室で昨日のことについていじられている光景を幻視した浩介は部屋で1人震えてしまう。

「……もうこんな時間か……」

しかし、どんなにイヤイヤと言つてもちやんと学校に行く辺り、浩介の人柄がわかるというものだ。

部屋の鍵を閉めてトボトボと歩いていくその姿は、とても大事件を解決に導いた英国の英雄や、バチカン、もといちよつとした地球の危機を救った英雄、伝説の酒呑童子に

惚れ込まれているスゲー奴、そしてE組で最も勝てない人間認定されていた烏間先生を倒した人とは、到底見られなかった。

「コウスケ・E・アビスゲート！推して参る!!」

「グハッ……………」

教室の扉に手をかけ、開けようとした瞬間に中からどこかで聞いたイタイ名乗りが響いた。

そう何をかの深淵卿の名乗りである。誰が言ったのかわからないが、それを聞いた途端浩介は膝から崩れ落ち、四つん這いになってしまった。

数秒ほどその場を動けないでいると、何かにぶつかり顔を上げる。

「ん？……………うわつごめん！……………遠藤君どうしたの？蹲って……………」

「……………渚君か、いや大したことないよ……………」

渚にぶつかって現実に戻り、どうにか心のダメージの余波から回復した浩介は再び扉に手をかけて、今度こそ開けた。

「フツ、反撃しなければついて来れまい？」

「ギヤアアア!!」

教室で香ばしいポーズをとり卿の真似をしているクラスメイトを見て、浩介はたまた

ず教室を飛び出した。

「遠藤君!？」

「おお！アビスゲートか!……………あれ？アビスゲートは？」

「た、たった今走り去っていったけど……………」

教室から逃げるようにステータス全開で走っていた浩介は外に出た瞬間屋上に飛び乗った。

とりあえずここなら安全だと判断して一息ついた。

「あれ、どうしたの？アビスゲート君？」

「グハツ……………」

安全地帯など無かった。と言わんばかりに今一番聞きたくない名前がここでも聞こえた。

声の主はカルマで、朝からここで二度寝？にふけていたのだった。

「もう嫌だ。E組コワイ、何も聞きたくない……………」

流石にここまで連続でこられることなど無かったため、浩介の心が音を上げている。

浩介が体育座りに耳に手を当てて、イヤイヤする情けない姿を見たカルマはなんのとか思い当たり、苦笑いを浮かべた。

「あ……………アビスゲートって呼ばれるの嫌だった？」

「嫌なんてもんじゃない。消し去りたい黒歴史だ」

「ごめんね？俺が悪ふざけで昨日みんなにアビスゲートって呼んであげよって言った」

「おまえかあ！」

どうやら、朝から何度も聞いたアレはカルマの差し金のようだった。

ということは渚君は赤羽の提案を聞いても尚、俺のことをアビスゲート呼びしないでくれたということかつ……。なんていいやつなんだ！

「あはは、ごめんって……。それにしてもあんなに強いのになんで嫌なの？」

「いや、だつてほら、厨二じゃん？いい歳して厨二なんて……。ねえ？」

「いや、でも俺らまだ中3だし、大丈夫でしょ」

「そういやそうだったな……」

今更ながら、浩介は自分が今中学三年生の体だと思い出した。しかし、たとえ体は中学三年生でも心は立派な高校生だ。

まだ、ハウリア族と一緒にいるときはいい、だつて俺と同等、もしくは以上の厨二がゾロゾロといる。(今も増え続けているらしい)その中でなら俺が浮くことはあまり無い、無理に平静を保つてもラナに嫌われるなんてことになつたら(南雲曰く絶対にないらしいが)俺はこれから生きていける自信がない。

「そういえば、昨日リア充がどうか言ってたけど、彼女でもいんの？」

「……………いる」

突然の話題転換に少し困惑しつつ、別に隠すことではないと思つた浩介は素直に答える。

「じゃあ、その彼女さんは知ってるの？ 厨二のこと」

「知ってるも何も、俺を厨二にしたのは彼女だし……………」

「へえ、ならいいじゃん厨二でも」

赤羽のいうことはたしかにその通りなのだが、これはそういうことじゃなくて単純に浩介の羞恥心の問題なのでどうしようもない。

早く大人になってトータスに移住したい……………そうしたら少なくとも今よりは恥ずかしく感じないはずだ。きつと……………たぶん……………

あまり自信を持ってないが、今だけの辛抱だ！ ラナとの未来のためにもこんなところで精神をやられちゃダメだ！ 次期ハウリアの族長だろ！ つと最後のはちよつとアレだが、とにかく気合を入れ直して浩介は立ち上がった！ 以前よりも心を少し強く持つて立ち上がった!!

「そろそろ教室に戻らないと殺せんせーが来るんじゃないか？」

「ん？ 俺は今日はサボろっかなー」

「おいおい………」

結局俺一人で教室に戻るとみんなが謝ってきた。

曰く、昨日赤羽に乗せられた。曰く、純粹にカッコいいと思った。曰く、気にしてると思ってたかった。

という感じだ。悪意が微塵もないため、強くやめろと言えない。それに、別にもはやいつものこととなっていてきているので謝らなくてもいいが「これからはやめてくれ」と言って、この話は終わった。

「それでは出席をとります！日直の人は号令を！」

「起立！気をつけ！………礼!!」

号令とともに、各々の持ったハンドガン型やアサルトライフル型のモデルガンを発砲する。

俺は銃なんてからつきしどころか触りたくもない。

もちろん、浩介だって最初は銃に興味があった。しかし、以前南雲に貸してもらった時に、危うく自分で打った弾で死ぬところだったので、それ以来銃には触らないようにしているし、南雲からも絶対に触るなど言われている。

それではこの時間俺は何をするのか？ということになってしまいが、ワイヤー付きク

ナイで殺せんせーを狙っている。ワイヤー付きと言っても引っぱったり、しならせたりしてクナイを操作しているわけではない。そんなこと俺にできるわけがない。

これまた南雲謹製の重力魔法付与のクナイ&ワイヤーのアーティファクトだ。ワイヤーに直接魔力を込めるので周りの弾を引き寄せたりする心配が無いので安心して使える。

殺せんせーも俺がクナイを取り出した時「クナイ？そんなの当たるわけないでしょ！」と顔を縞々にしていたのだが、今は必死に出席を取りながら避けている。なにせ、俺がワイヤーで操っている（ように見える）クナイは4本あり、その全てがみんなの射撃の手助けをしている。

どういふことかと言うと、まずもちろんだが銃とクナイでは魔法を使っているとはいえ、銃の方がこの狭い教室の中では速い。普通に狙っても大きさもBB弾より大きいクナイは簡単に避けられてしまう。

そのため浩介のクナイはそれぞれ2本ずつ教室の右と左に展開しており、どうやっても殺せんせーに当たらないだろ。という弾が来た時に、その弾を弾くことによつて、軌道修正と再加速を行なっている。

結果的に、浩介が来る前までは正面から飛んでくる分だけ避ければ良かったのが、今はほぼ360。全てから飛んでくる弾を、幅が狭い中避けなければならなくなつたとい

う事だ。

「にゅやっ!?!」

そして暗殺教室始まって以来初めて、殺せんせーの触手に弾が掠ったのだった。

「ゼエーゼエー……………今日も命中弾ゼロですねぇ〜」

「いやいや! さつき当たってただろ!!」

「……………あれは掠っただけなので命中ではありませんせん」

「『汚ねぇ』」

拝啓、南雲様………E組、マジヤベエっす

「それでは授業を終わります。では実験に使用して残ったお菓子は先生がいただきます
！」

「ちよっ！それ俺達を買ってきたやつじゃん!!」

「先生今月ピンチなんです！」

理科でお菓子から色を抜き出すという実験をしていたのだが……

生徒からお菓子を奪わないと食って行けない先生っていったい………というかこの
超生物給料で生活してんのね。

殺せんせーがブーイングの嵐に見舞われている中一人の生徒が立ち上がった。その
生徒は殺せんせーの前まで来ると後ろ手に持った試験管を殺せんせーに突き出して
言った。

「毒です！飲んでください！」

その一言でブーイングの嵐だった教室は静まりかえり、誰もが驚愕の目を向けてい
る。そして、殺せんせーにそんなアホな暗殺？を仕掛けた眼鏡っ子の奥田愛美は必死に
試験管を突き出したまま動かない。

いくらなんでもこれで飲んで死んだなんてなったら哀れすぎてなんもいえねえな
……

「これはまた正直な暗殺ですね。奥田さん」

「あ、あの、私みんなみたいに不意打ちとかできなくて……でもでも、化学は得意なので、真心想めて作ったんです！」

「いやいや、真心想って……それで毒が美味しくなるわけでも、まして、毒性が消えるわけでもないのに飲むバカがどこに……」

「せっかく作ってくれたので、いただきましょう」

ここに居たわ。

ていうか、奥田さん一人で毒作ったのか？危ないなんてレベル通り越してるような気がするんだが……そもそも、化学が得意だからって、そう簡単に毒って作れるものなのか？

そんな考えを巡らせている間に殺せんせーは3本ある試験管の内一本を躊躇なく飲み干した。

「ぐっ！ぐうううううっ!!」

殺せんせーは突如苦しそうな声を上げ、気持ち体をかがめた。

これで死んだら俺が中学生になった意味って……

ニヨキ

「「は？」」

呻き声が止んだかと思うと、殺せんせーの顔が水色になり小さい二本のツノのようなものが生えた。

「水酸化ナトリウムですね。人体には有毒ですが先生には効きません」

「そ、そうですか……」

「では次は……」

薬品名と効き目を言うの間髪入れずに2本目の試験管の中身を飲み干した。

「ぬうっ！ぐおおおおおっ!!」

バサッ

今度はツノはそのままに顔が薄緑色になって、頭に羽が生えた。

無駄に主張の強い顔になってきた。いや、前から顔色が（文字通り）変わってたから主張強かったけども。

「酢酸カリウムですか。これも先生の顔色を変えるだけです」

「は、はあ」

「では次で最後ですね」

「これまた薬品名と効果を言って最後の試験管の中身を飲み干した。」

「ぬっ！ぐうっ！ぐ、ぐおおおおおおおおおおあああああ!!」

今まで以上に苦しんでいる様子の殺せんせーだがどうにもわざとらしい感じがする。

奥田さんには悪いけど、殺せんせーに効いていないと確信して今度はどんな変な顔になるのかと考えを巡らせていると……

ポン

「……………」

あれは……なんだ？真顔か？

殺せんせーの顔はパーツが増える事はなく逆に、すべてのパーツがなくなり色も真っ白になって、口までもが目と同じように点になっている。

「王水ですね。これも先生には真顔に変えるくらいの効果しかありません」

「そ、そんなんですか……」

真顔であつてたのかよ……つて言うか王水つてあれだよな。金属をなんでも溶かせるつてやつだっけ？そもそもなんで中学生が王水を作れるのかつて話だけど、この調子だと毒殺なんて無理そうだな。

そもそも今更だけど、なんで劇毒の目利きが出来るんだよ。普通飲もうなんて考えないだろ。

「先生の事は嫌いになつても暗殺のことは嫌いにならないでください」

「古くね？」

放課後になると各々が帰宅を始めたり、校庭で射撃の練習をしていたり、普通に友達と喋ったりしている中、浩介はあの奥田さんが理科室の方へと笑顔で向かって行くのを見た。

今日最も怖い王水を渡してダメだったのに、また毒を作るつもりなのか……と呆れたが、まあ、人には人の暗殺があるのだろうし、口を出すのは無粋か……とも思い、その場を後にした。

翌日いつも通り誰にも気付かれない中、自分の席に座って若干遠い目をして、クラスメイト達を眺めていると、笑顔で試験管を手を持つ奥田さんが目に入った。

渚達に試験管について聞かれたため、答えているようだったのだが聞き耳を立てていると、どうやら昨日殺せんせーが理論上は一番効果があると言って、一緒に作ったようだ。

つまり昨日浩介が奥田さんを見かけたのはまさにそういうことだったらしい。

いやいや、ターゲットと一緒に作った毒をターゲットに飲ませるってどうなのよ……しかも、レシピもターゲットが持ってきたものだし……

「ねえねえ、この冊子は何？」

「これですね。殺せんせーが私にくれたんです。毒の取り扱い説明書です。毒の正しい保管方法などがわかりやすく漫画で書いてあるんです」

「へ、へえー……漫画で……」

毒の保管つてどこに保管すんの？まさか、家で保管するんじゃないよね？もし親とかに見つかったりでもしたら……殺せんせー解雇なんてレベルじゃないぞ？

「きつと私を応援してくれたんですよ！国語なんて分からなくても、私の長所を伸ばしたらいいって！」

もはや渚達の会話しか聞いてない浩介だが、それでも一応殺せんせーが来る気配がしたため、傾けていた意識を戻してこれから何が起こるか予想をする。

毒つて言つても殺せんせーがわざわざわざ本当に自分に効果がある毒を作るとは思えないからな。「実はなんともありませんでした」なんてして少し疑うことを教えるくらいのもんだろ。

そう思つてた時期が俺にもありました。

「あつち行つたぞ！」

「ダメだ！速いくせに今までより小さい分当てられない!!」

「天井の隙間とか反則だろ!!」

「なんなんだよこれ………」

今現在、殺せんせーは銀色の溶けたような体？になっていつも通りの速さでヌルヌル動いてみんなの攻撃を避けまくっている。

そう、溶けた体でもものすごい速さで、だ。ここに南雲家の誰かがいたのならば必ずこう言うことだろう。

「はぐれメタルスライムだっ!!!」

と。実際に浩介も「ああ、どっかで見たことあるなあ」なんて思ったが、めんどくさくて思考を放棄してしまった。

なんでこんなことになっているかというところ……

「先生、これ……」

「おや、さすがです。では、さっそくいただきます」

殺せんせーが教室に来て、すぐに奥田さんは殺せんせーに毒を渡し、もちろん殺せんせーは躊躇うことなくそれを飲み干した。

飲み干した後数秒経つと、ドクンツと殺せんせーが一度震えた。

「ヌルフフフフ。ありがとう奥田さん。君のおかげで先生は新たなステージに進むことができそうです………」

「え……それってどういう……」

クラスのみんなは殺せんせーの発言に呆然としていたが、毒を渡した本人の奥田さんは、ほぼ無意識のような様子で殺せんせーに尋ねた。

しかし、殺せんせーはその質問に対して返事をする事なく、体をかがめて溜めのような事を行った。

そして……

「ニユ……ヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

という雄叫びと共に光を放ち、それが止むと殺せんせーは元々立っていた場所にはおらず、教卓の上に銀色で溶けた殺せんせーがいた。

「ふう」

「「溶けたっ?!」」

「君に作ってもらったのはね、先生の細胞を活性化させて流動性を増す薬なのですよ」
殺せんせーは穏やかに説明をしていたが、当の奥田さんとは言えば呆然と殺せんせーを見ていてあまり聞いていそうになかった。

結局、殺せんせーが片岡さんの机に入ったところから暗殺大会が開始され、今に至る。

「ちよ、奥田さん、あの薬って!」

「騙したんですか？殺せんせー！」

ようやく思考を取り戻した奥田さんは、悲しそうな声で殺せんせーに問いかけた。

「奥田さん。暗殺には人を騙す国語力が必要なんです。どんなに優れた毒を作れても、それを今回みたいに馬鹿正直に渡しては、ターゲットに利用されてしまつて終わりです」

「……………はい」

「そこで…渚君！君が先生に毒を盛るとするなら、どうしますか？」

「え？」

当然話を振られた渚君は少し考えてから答えた。

「うくん、先生の好きな甘いジュースで毒をわつて、特性ジュースです。とか言つて渡す…とかか？」

うん、普通なら誰でも…とまではいかなくても、何かに混ぜるまでは思いつくもんだよな。

「そう。人を騙すには相手の心を知る必要がある。言葉に工夫をする必要がある。上手な毒の盛り方。それに必要なのが国語です」

「はっ……………」

なるほど、殺せんせーはこれを分からせるために、会えて奥田さんを騙したわけか。

まあ、それでも殺せんせーがパワーアップしたのはこちらとしては痛い気もする。

浩介が一人でこれからについて考えている中、殺せんせーによる奥田さんへの特別指導が続いていた。

「君の理科の才能は将来みんなの役に立たせられます。それを多くの人に分かってもらえるために、毒を渡す国語力も鍛えてくださいね」

「はいー！」

先生の激励に、奥田さんは嬉しそうに返事をした。

まあ、これはこれでいいか。将来優秀な学者が育つと思えばなんともないさ。いざとなったら南雲がやってくれるだろうし。